

俳句通信

特別作品25句 青山 丈「この春は」

特集 〈先人の句、わたしの句〉

蘭草慶子・角谷昌子・菊田一平・草深昌子・坂本宮尾・須原和男・坪内稔典
中西夕紀・仲村青彦・西池冬扇・秦 夕美・坊城俊樹・前北かおる・松尾隆信

追悼・山崎千枝子

山崎千枝子50句(岡山祐子選)

根橋宏次・杉山昭風・岡山祐子・
小宮久実・小室井人・澤田 敏・
沢田弥生・永易まるみ・波多野緑・日吉怜子

【5人競詠20句】

すずき巴里 「ひらり」
波戸岡旭 「尋常の朝」
藤本美和子 「蟄居」
広渡敬雄 「春岬」
長嶺千晶 「友」

【新鋭作家30句】

八田夕刈 「墨は墨の」

【近詠24句】

野崎真舟 「春が来た」



●作品● 安西 篤・高橋さえ子・酒井弘司・高崎公久・染谷秀雄・渡辺桃枝・高野ムツオ
横澤敏川・岩岡中正・根岸善雄・山田貴世・中村幸子・中山和子・行方克巳・浅井陽子
谷中隆子・野木桃花・柴田多鶴子・守谷ゆき・大石雄鬼ほか



妙高山を
望む
邑の夏

上越市板倉区

写真・樋口一成

そこいらに日暮きてゐる金糸梅

大崎紀夫

金糸梅

釣り人には自分だけの好きな釣り場、ポイントがあつて、足繁く通うが、必ずしもよく釣れるとは限らない。成功体験による本人の思い込みの場合が多い。

私にもひとつだけ梅雨時の円山川にマイポイントがある。特に良い釣りをした訳ではない。土手の急な斜面で足場も良くない。おまけに釣具を担いで汗だくで藪漕ぎをしなければならず、時にはマムシも出る。私以外ここで釣りをする人はいない。

対岸の土手越しの山が梅雨に濡れて緑濃く、河川敷に並んだ背の高い柳の木が揺れ、土手にはひと抱え程のこんもりと咲く黄色い花があつていいアクセントになつていて、梅雨の憂うつうしさを忘れさせてくれる。こののびやかな風景が気に入っている。こんな中で釣れるヘラブナは格別に魅力的である。

黄色い花の写真を撮り調べると金糸梅であつた。江戸時代に鑑賞用に輸入され、野生化したものの様だ。



特別作品25句

この春は

青山 文

綿虫を着けて家まで来たとおもふ
薄氷へ濡れたる棒が投げてあり
葉牡丹をどれほど見たか見てをりぬ
自転車をとつくにやめてチューリップ
見に行くと道は古巢に遠くなる
これ以上白くならない花なづな

特集

〈先人の句、わたしの句〉

先人の（関心のある、あるいは興味を抱いている）句、
数句をあげ、それらの句にどう向きあっているか、
また自作数句を取り上げて、
自分が目指しているもの等について14人の俳人にお書きいただきました。

「魔封じ」をする女 池田澄子

西池 冬扇

池田澄子の句は阿修羅像に例えようとしても無理だ。いくつも顔を持つてはいるが、あの苦悩の顔に擬するのはふさわしくない。ともあれ池田澄子の句はいくつかの顔を持つ。命の在り様を悟った如来のような顔、未来への癒しを司る菩薩と呼んだ方がよい顔、魔を封じ込めようとする妖しげな明王一味のような顔。とりわけ私はカラオケでオジサンたちがよく歌う高橋真梨子の歌に出て来る「そっとジユモンをかける女たち」のような顔が好きだ。ちっともバタ臭くないのが良い。

池田澄子という（「じゃんけん」の句をはじめ「ピーマンを切つて」など命の不思議さを謳いあげたり、日常の中に気づくウィットに富む句で知られている。いずれも読者に面白いと感じさせるところが魅力である。だが忘れてはならないのが戦争を中心とする句、興味が人間そのものと社会の関係、いわば「社会性」を讀者にも感じ取らせる一種の象徴性にとんだ句が非常に巧みなことである。

それらの「社会性」のある句を読んで感じることは、どちらかという社会的材料を真正面に取り上げて振りかぶるといふより、俳句の中にとつと呪文のようにしるばせて

おくという方法だ。私は、それは人間社会の未来の希望のために現れてはならない過去の魔物を封じる呪文であり、あるいは風化していく人間の過去の体験に対する忘れることへの拒絶がなせる技でもあると思う。

過去を忘れることの意味を問い続ける小説家にカズオ・イシグロがいる。彼はノーベル文学賞の受賞講演の時、アウシュビッツの例をあげながら、人間が個人的、或いは社会的に覚えておくべきことと忘れるべきことの意味を問うた。人間を探求するという行為はいくら大上段に構えても五七五の短い言葉の中で語れるものではない。短い日常の情趣の中にそつと呪文のように忍ばせて読者の中で芽をふいたり、発火させたりするものである。言葉の中にしるばせる呪文、それこそ俳句ならではの技である。

池田澄子には「魔封じ」をする女としての顔がある。

◇

旗日とやわが家に旗も父もなし 〔空の庭〕

「とや」という言葉は伝聞・不確定の意味や問い返して確認を得る意をもつ。このような助詞の使い方は「切れ」が

追悼



山崎 千枝子

「療」代表の山崎千枝子氏が

2020年3月27日、心不全で亡くなりました。

77歳。

人柄も俳句も多くの人に親しまれた俳人でした。

2005年1月能登半島

